

杉沢遺跡の発掘・その②

— 発掘調査と地域のかかわり —

平成二四年度の調査

学生の夏休みを利用した杉沢遺跡発掘調査は、八月九日から三一日に行われました。調査には担当した立命館大学のほか、京都大学、龍谷大学の学生・院生約九〇人が参加して、夏の杉沢にひとときの賑やかさをもたらしました。

二三年度の調査で木の実類を貯蔵した縄文時代の穴がふたつ見つかリ、住居が近くにあることが推定されることから、今回は、その周辺の標高のやや高い場所と、逆にやや低い場所に調査区が設定されました。木の実を入れた穴の周辺の状況を把握し、住居の有無を確認するためです。残念ながら、今回の調査では住居跡は見つかりませんが、以下のような成果が得られ、杉沢遺跡の重要性や縄文時代の様子がわかりました。

木の実類を貯蔵した穴(貯蔵穴)

二三年度に見つかった貯蔵穴SK4は、直径約五〇センチ、深さ約六〇センチの穴で、底は水分を多く含む水が湧き出る層まで掘られていることが確認されました。木の実類を良好に保管するために掘られたものと考えられました。穴の中からは、縄文時代晩期の土器片が出土しています。他の調査区でも、土器を利用したお墓の下から、植物の遺体を多く含む直径約一〇〇センチ、深さ約八〇センチの大きな穴が見つかり、底が水分を含む地層まで達していることから、これも貯蔵穴であることがわかりました。このほかにも見つかっていて、いずれも縄文時代晩期後半のものと同推定されています。貯蔵穴SK4から出土した木の実類の多くはトチの実で、実に殻が

いた状態で埋められ、永い年月を経て炭化しています。今回の調査では、これらを「放射性炭素年代測定法」という科学的な方法で、年代測定が行われました。その結果は、穴から出土した縄文土器の年代とほぼ一致する縄文時代晩期後葉（今から二四〇〇から二六〇〇年前頃）の年代に相当しました。

埋葬施設

杉沢では、これまでに一一組の甕棺が見つかっていることを前回紹介しました。今回の調査では、長径一二二センチ、短径八三センチ、深さ一七センチの浅い穴が見つかり、中から縄文土器の破片二〇点が出土しています。この穴の縁を取り巻くように大きな石が並べられていました。また、穴を埋めた土が塚状に盛り上がり、二三年度にも土器を用いた同様の穴が見つかっていることから、成人のお墓か石を並べたまつり場の跡の可能性が考えられています。

このほか調査では、古墳時代以降の穴や土器、奈良時代の土器が見つかっています。また、住居の発見を期待して設けられた標高のやや高いところの調査区では、奈良時代の土層が厚く堆積し、縄文時代の生活面はさらに深いか、縄文時代、ここに

河川があつた可能性が考えられます。

今回、杉沢地区の方々と関わりを持って調査を進めることで、発掘調査の活性化にもつながりました。一日の区夏祭りでは、学生がスタッフとして参加され、発掘調査の状況や目的が紹介されました。教育委員会主催の歴史体験教室では、居残り夕方まで参加する熱心な児童もいました。「考古学」を肌で感じてもらう、普段の生活では得られない体験を通じて、遺跡の保存や伝承にもつながっていく調査になりました。

※本稿では慣例に従い遺跡名は「杉沢」、自治会名は「杉沢」を用いています。



▲ 発掘体験